

ト教民主党の利益とがしばしば衝突するにもかかわらず、両者の排他的結合によって、ビジネス階級の政治的的代表になっているのはいぜんとしてキリスト教民主党である。しかし、伝統的に反ブルジョア政党でありながら、昨今では体制の変更と合理化の党となり、こうして組織されたビジネスとの対話を展開している共産党の果たす役割によって、いまや事態はいっそう複雑なものになっている。

〔訳者注記〕

1. 原文にアンダーラインのある語は、訳文ではゴチックまたはイタリックで表記した。

2. 原文では、1, 2, 3……の章別だけで、各章のタイトルは付けられていなかったが、読者の便宜を考慮して訳者がタイトルを付した。
3. 6章も原文にはなかったが、5章が長文にわたるため、読者の便宜を考慮して訳者の判断により6章をもうけた。もしタイトルと内容とが不適合であれば、それは訳者の責任であることをおことわりしておきたい。

(Alberto Martinelli, "Business Organized Interests and Politics: The Italian Case", the Report in the Symposium by Bocconi University and Momoyama Gakuin University held on August 23-24, 1977 in Osaka.)

〔野村 昭夫 訳〕

〔解 説〕

現代イタリアにかんするすぐれた政治社会学的分析

——マルティネッリ氏の論文について——

この稿は、1977年8月23—24日、大阪で行なわれたイタリアのボッコニ大学と桃山学院大学との第一回共同シンポジウム（「現代日本の社会——国際比較の観点から」）の第2部における、国立ミラノ大学助教授アルベルト・マルティネッリ氏の報告を全訳したものである。英文の原文は、最近当研究所で作成したこのシンポジウムの記録集に収録されている。シンポジウムにおけるマルティネッリ氏の報告は、第2部（「経営者の行動」）でおこなわれたが、ここに訳出したペーパーはその報告を基礎に、帰国後同氏がシンポジウムで提起された質問や問題点をも加えて、あらたに書きおろしたものである。したがってかなりの長文となっているが、そのかわり疑問点や問題点が整理され、現代イタリア情勢の重要な一側面がみごとに浮き彫りされているように思われる。

シンポジウム第2部でとりあつかわれたメイン・テーマは、戦後のイタリアと日本における経営者のビヘイビア、なかでも政府と企業との相互関係の分析と評価ならびにその比較であった。日本については稲別、植村両教授がこの問

題を検討し、いわゆる「日本株式会社」というテーゼ（政府と企業との関係が「一枚岩」だとする通説）は一面的であり、再検討の余地があるという興味ぶかい観点を提起された。これにたいして、シンポジウムでの報告ならびにこのペーパーでマルティネッリ氏が分析の中心にすえたのは、戦後のイタリアにおける「組織されたビジネス」（"organized business"）と政府との関係の変化を検討することであった。この両者の関係の精密な分析が、現代イタリアの情勢を理解するうえでのひとつの決定的なカギとなることはいうまでもない。

マルティネッリ氏のいう「組織されたビジネス」とは、なによりもまずイタリア最大の企業家団体であるコンフィンドゥストリア（Confindustria——イタリア産業連盟）を指すが、イタリアの情勢の展開に重要な役割を果しているのは、けっしてこれだけではない。なぜならイタリアにおける企業経営者階級（マルティネッリ氏の用語によれば「ビジネス階級」）は、国有企業管理者あるいは中小企業経営者をも含めればさまざまな層に分岐しており、その政治的、

イデオロギー的立場や戦略、政策はさまざまに異なっているからである。マルティネッリ氏の分析によれば、そのグループ分けと相互関係とは、ほぼつぎのようになっている。

まずコンフィンドゥストリアの内部には、大別して、伝統的パワー・グループ（ミラノの金融・電気グループ）と、民間寡占諸企業とのふたつのグループがある。これにコンフィンドゥストリアから離脱して設立された国家管理企業の経営者組織 Intersind を加えれば、イタリアの企業経営者層は3つのグループに分類されることになる（中小企業経営者は伝統的パワー・グループに結びついている）。戦後のイタリアにおいて経済の計画化、一部産業の国家管理をはじめとする新資本主義的経済、社会諸政策を、中心となって推進してきたのは、国家管理企業経営者およびテクノクラートたちであり、貿易・為替自由化の推進によるイタリアの開放経済への移行によって利益をうけとる民間寡占企業が、これと不即不離の関係をたもちつつ、1960年代半ば以降、ビジネス階級の戦略の立案、実行にあたってきたのである。

さらに、イタリアのビジネス階級内部の3つのグループは、それぞれ個別に、戦後一貫してイタリアにおける権力党であったキリスト教民主党内の各政派とむすびつき、それぞれ自分たちの戦略、政策を追求しようとしてきた。こうした意味でいえば、1960年代半ば以降のイタリアにおいては、コンフィンドゥストリアもキリスト教民主党もともに、単一の、同質の、「一枚岩」の組織ではなくなり、前者と後者のそれぞれのグループが個別に結合し、個別に密接な関係をとるむすぶという複雑にいくんだ情勢が生まれた。

こうした情勢のなかで、60年代半ば以降のイタリアにおける政治的イニシアティブをにぎってきたいわゆる中道左派連合とは、前記国家管理企業のテクノクラート層と、ファンファーニにひきいられるキリスト教民主党「左派」との連合勢力を中心とするものであり、これにコンフィンドゥストリア内の民間寡占企業グループが消極的支持をあたえて存続してきたものであ

った。このかぎりでは、キリスト教民主党右派ならびにこれとむすびついたコンフィンドゥストリア内の伝統的パワー・グループ（ミラノ・グループ）は、イタリアの国家的意思決定過程における主導権をほぼ完全に喪失してしまったとみることができよう。イタリアの政界、産業・経済界における諸勢力の基本的配置ならびに相互の力関係にかんして、マルティネッリ氏は上述のような鳥瞰図をえがいている。このような図式は現段階のイタリアにおける政治、経済、社会の各側面にわたる、またそれらを総合したトータルな情勢をときほぐし、正確に把握するのにきわめて有効であり、複雑にいくんだイタリア情勢を理解するひとつのカギが、こうしたところにひそんでいるといえよう。

もちろんイタリアにおける情勢展開のカギをにぎるのは、右のようなビジネス階級ならびに政権党内部の各グループの配置と力関係だけではない。マルティネッリ氏が分析しているようなこれらの配置と力関係における1960年代半ば以降の変化は、ふたつの要因によって規定され、影響されたものであった。それは1つは開放体系のもとでの海外からの競争であり、もう1つは労働の側からのインパクトすなわち労働組合の力量の強化とビジネスならびに政府との力関係の変化である。情勢の展開を規定する主要な動因はこの側面にあり、この側面での力関係の変化が、マルティネッリ氏の分析したビジネス階級内部における諸勢力の配置図と相互の力関係、ならびにこれと諸政治勢力との相互関係に、注目すべき変化をもたらした基本的な要因だったとみることができる。こうした意味でいえば、このペーパーにおいて、イタリア情勢にあたえた海外からのインパクトの分析がなく、また労働の側からのインパクトは「独立変数」として、分析の射程外におかれているのは、多少物足りない感がないでもない。だがこうしたことは、シンポジウム第2部のテーマから考えて望蜀の言というべきであり、イタリアにおけるビジネスならびに政治諸勢力の相互関係に的をしばって、情勢の精密な図式をえがいたこのペーパーの価値をいささかも損なうものではないと考え

る。

なお、マルティネッリ氏がこのペーパーでもちいた「ビジネス」あるいは「ビジネス階級」という用語について、簡単にふれておきたい。このことばは、われわれにとっては耳慣れない、また一見あいまいな概念であるかのような印象をあたえる。だがこの言葉には、たんに企業あるいは産業・経済界という以上の広範な意味内容が含まれている。それは企業のディメンジョンでは国家管理企業、中小企業をも含み、また機能的にはたんに経営者だけでなく、これらと結びつく政党、政治諸勢力あるいは政府省庁、国家管理企業のテクノクラートをもふくめて、要するに現代イタリア経済の中核の管理運営にたずさわっているあらゆる諸勢力を含んでいる。したがってこの用語は、一方では古典的な資本家階級が姿を消し、他方では経済過程への国家介入がいちじるしく強化された現代において、

一国経済の管理中枢をにぎり、それに参画するあらゆる階級、勢力を包括的に表現するものとしてもちいられていると理解することができる。こうした理由で、訳文においても、このことばは強いて翻訳せず、大部分の場合そのまま使用した。

さいごにアルベルト・マルティネッリ氏は、国立ミラノ大学、ボッコーニ大学で経済社会学、経営学の講座を担当する新進気鋭の研究者で、政治学、経済学、経営学、社会学など広範な諸分野にわたる学際的な研究に多くの業績をあげており、このペーパーも現代イタリアにかんする政治社会学的分析のすぐれたひとつの典型だということができる。同氏はまた、イギリスの *Challenge* その他の雑誌に、多国籍企業やイタリア共産党の経済政策にかんする英文の論文を発表し、国際的にも活躍していることをつけ加えておきたい。

〔野村昭夫〕